

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める② 庫本 正

会長就任にあたって 白井啓二

表彰受賞者活動紹介

やまぐち県民活動パワーアップ賞

出会いの森ファンクラブ

環境学習功労者知事表彰

中村裕三



共生



会員だより

古市節分草保存会

錦川オオサンショウウオの会

NPO法人ナベヅル環境保護協会

ヒュッテ桂谷ランプの宿

山口県シェアリングネイチャー協会

第11回リレーミーティング in 錦川流域
会長表彰



やまぐち自然共生ネットワーク

平成27年1月31日

共生の思想を深める ②

環境問題の本質

庫本 正

地球温暖化はどんどん進んでいきます。その結果 日本列島でも、これまで経験したことのない豪雨が各地で起こるようになってきました。地球温暖化を起こしている原因は化石燃料による二酸化炭素かどうか 異論がある。いずれにしても私たちは未来に向かって環境問題に何をなすべきか、深く考えて、行動をしてゆかねばなりません。そこで環境問題の本質について、丸山茂徳さんの言葉を紹介しましょう。

『石油資源を背景に、本来、生態系の中で許容される人間の数をはるかに凌駕するほど人間の数が増えてしまったために起きたのが今日の環

境問題の本質である。人口が増加してきたばかりに、本来、森林であった場所が切り開かれ、多くの野生動物が生息地を失った。これからの時代は野生動物に生息地を戻していくことにもなるはずだ。大型の野生動物だけではなく。ちっぽけな微生物を含めすべての生物は、地球に生命が誕生して以来、40億年かけて進化してきた貴重な存在なのだ。人間だけが地球を独占するような思想は捨て去るべきだ。』

丸山茂徳 (二〇〇八) 『科学者の9割は「地球温暖化」CO2犯人説はウソだと知っている』(宝島社新書より)



「人の目を入れたアマガエル」

会長就任にあたって

錦川流域ネット交流会

白井啓二

昨年5月の通常総会において第4代会長に就任いたしました錦川流域ネット交流会の白井啓二です。よろしくお願ひいたします。

この会の目的は、自然活動団体等のネットワークを形成し、情報交換等連携を図ることにより、自然の保全等の活動を促進し、山口県の豊かな自然を後世に引き継ぐことです。

主な活動として、自然活動団体等の相互の情報交換と交流、連携のため、毎年1回、県内各地を持ち回りでリレーミーティングを行っています。第1回が周南市の八代地区、第2回は秋吉台、第3回岩国市の錦川流域の羅漢高原、第4回下関市の角島、第5回山口市の榎野川、第6回周防大島、第7回萩市、第8回周南市鹿野町の長野山、第9回山陽小野田市の竜王山、第10回山口市の徳地町、そして昨年の第11回は岩国市錦町の羅漢山で開催されました。私は11回のうち7回参加しましたが、とても有意義なものです。地元の人々の案内で詳しく説明をしていただきとてもよくわかります。目からウロコが落ちるようなこともたびたびあります。そして夕方からの懇親会は、地元の特産品とお酒で、県内各地か

らのみなさんと交流が持てます。たいへん楽しいひと時です。私はこの場が一番の情報交換の場だと思えます。今年のリレーミーティングの場所はまだ決まっていませんが、今年も多くのみなさんの参加をお願ひいたします。そして、この会報「共生」も今回で14号となりますが、県内各地の活動報告が掲載され、他地域のことがよくわかります。皆様の記事の投稿もぜひお願ひいたします。

また、ホームページも今年から、前事務局長の岡谷さんが更新をしてくださいました。本当にありがたいことだと感謝いたします。

先日、広島経済大学の学生たちが取り組んでいる「若旅プロジェクト」と錦川流域ネット交流会、私の友人が代表をしています「長野仰山塾」の共催で「海彦山彦IN宮島」というイベントを開催いたしました。奇跡の一本松で作った復興バイオリンを東京からお借りして、広島市民オーケストラのみなさんが演奏してくださいました。すばらしい演奏でした。このバイオリンで世界の1000人の方に演奏してもらおうそうです。基調講演は、80歳でエベレストに登られた三浦雄一郎さんの同行医の日本初国際山岳医の大城和恵先生のお話でした。医学のフィルターを通して見た三浦さんは、油断したら大病しかねない「メタボのおじいさん」でしかなかったそう



海彦山彦 IN 宮島

です。低い山を登るのにも息絶え絶えだった人が、自分ができることを、無理せず楽しみながら続けることで、80歳でエベレスト登頂という大きな夢を実現させていったお話でした。その後、530mの弥山に先生と一緒に登りましたが、大変楽しい山登りでした。参加者たちも大変喜んでいました。こういう楽しいイベントもこの会でも取り組んでいこうと考えています。

今年もよろしくお願ひいたします。

表彰受賞者活動紹介

やまぐち県民活動パワーアップ賞

出会いの森ファンクラブ

大西知己

このたびは、第十五回やまぐち県民活動パワーアップ賞をいただき大変ありがとうございます。

「出会いの森ファンクラブ」の活動に多くの方々がかかわり様々な支援を受けていることにあらためて感謝いたします。「出会いの森」は平成十四年のオープンから十二年目となりました。この機会に「出会いの森」の様子と活動内容についてお伝えできたらと思います。

「出会いの森」は下関市の内日と清末を結ぶ県道40号沿いに位置します(下図参照)。この場所は、戦後まもなく下関で最初の開拓団(数世帯)により田畑として耕作されていましたが、十年位で他の地へ移転され以降、誰も足を踏み入れていない荒地となっていました。平成十三年、里山の管理も兼ねて地権者の好意により約一ヘクタールの土地をお借りすることになり、初代代表の故川村一昭さんを中心に荒れ果てたこの土地を再び開拓し始めました。そして、ついに、多くの人達の

知恵と力で荒地を「出会いの森」として復活させました。平成十四年四月に行った、オープニングイベントにて「出会いの森憲章」(次頁参照)を掲げこの森を健全者・障害者を問わず、子どもからお年寄りまで全ての人達が共有できる場所として、また素晴らしい出会いと幸せが訪れる場所となる願いを持って森づくりをスタートしました。

森を育む

オープン当初の頃に植樹した桜、クヌギ、コナラが順調に育ち大きくなりました。桜の時期には町中より少し遅い満開となり県道を行かうドライバーに癒しを、与えています。また「どんぐりの森」では、夏場にカブト虫やクワガタ虫が多く見られ訪れた子どもたちの楽しみのひとつになります。クヌギの成長が早く樹木同士が干渉するように今年より間伐を始めました。

7周年記念で植樹した実のなる木(栗、柿)は、鹿の被害と戦いつつ何とか生育している



「出会いの森」全景



「出会いの森」アクセス

状況です。木の回りをネットで囲う対策をして近年やっとな美味い実をつけるようになりました。

畑のエリアでは、子ども達の食育体験としてサツマイモ(植える草取り収穫する)を育て食べる一連の作業に取組める環境を用意しています。以前ここで体験した子ども達が、もう成人すると聞き、時の流れの速さに驚きつつ、これからも頑張ろうと思うエネルギーになっています。

体験活動

森で行う体験活動は、四季を通じて自然とのふれあいを大切に、森に入って積極的に見たり、触れたり、嗅いだり、いろんな事を実感することです。例えば、新緑の頃の森のマイナスイオン、冬と夏とでの森の中の明るさの違い、抜け落ちた鹿の角、猪が掘り返したあと、動物の糞、コゲラ（キツツキ科）などの木をつつく音、辺り一面の落ち葉等々、“百聞は一体験に如かず”です。

中でも、低木の伐採作業を兼ねた秘密基地作り体験での子どもたちのパフォーマンスは素晴らしいものがあります。切り出した枝を組合せて梯子を作ったり、立木の枝を利用してツリーハウスみたいに工夫したりといきいきと活動します。

森だけでなく地域のイベントに参加して交流も行っています。「小枝クラフト教室」として伐採作業で出る自然の枝を材料に物づくり体験を提供しています。しものせき市民活動センターで行われる七月のふくふくサポーターわくわく大作戦、環境みらい下関で行われる八月のサマー・キッズエコフェスタと十月のエコフェスタに出演しています。

また、アースデイ関門 in みさか自然の森では「森のアドベンチャー！」と題してストラックラインとロープクライミングの体験コーナ

ーを出展しています。

どのイベントでも沢山の方々に体験していただき、“ありがとうございます”の言葉をいただいで元気をもらっています。

最後に、オープンから十年以上経過し、様々な人たちが出会いの森を訪れました。年配の方は、子ども時代を思い出しつつ里山で過ごし、若い人や子どもたちは、非日常の世界に初めは戸惑いながらも自然に溶け込んでいていきます。「出会いの森」のスタッフはこれからも、いろんな「こと・もの・ひと」に出会える場としてこの里山を育てていきます。

今後とも
ご指導ご鞭撻の程よろしくお願
い申し上げます。



秘密基地作り体験

森は生きています。森の中には多くの生き物たちが生活しています。
私たちは、その森から多くのことを学び、夢と希望を得ることができます。
すばらしい出会いと人々の幸せを願って、ここに「出会いの森」憲章をかかげます。

- ★ 私たちは、森をたいせつにします。
- ★ 私たちは、美しい心をたいせつにします。
- ★ 私たちは、森からの恵みをたいせつにします。
- ★ 私たちは、森からの感動や喜びをわかちあいます。
- ★ 私たちは、森を通して多くの人たちとの出会いをたいせつにします。

(2002年4月 出会いの森オープン)

「出会いの森憲章」

環境学習功労者知事表彰

環境カウンセラー 中村裕三

この度、山口県環境学習功労者知事表彰をいただき、身に余る光栄と深く感謝しています。環境問題を多くの方と共に学び、教えられる事も多々ありました。その中で、環境教育実践の場をいただいた学校、地域、諸団体、環境学習推進センターのご支援に御礼申し上げます。

樹木医と環境教育

樹木医制度は、平成3年に林野庁の国庫補助事業「ふるさとの樹保全対策事業」としてスタートしました。全国の貴重な樹木の樹勢を回復し保全させる樹木医を養成することを目的としています。平成26年末で、2443名(女性218名)が全国で認定されました。山口県では、33名(女性2名)が活動しています。この人数は、中・四国各県の中では最大です。

防府市にある山口県天然記念物の向島小学校「蓬萊ザクラ」、防府天満宮「通り松」、佐波小学校「ヤブニッケイ」、松崎小学校の「カラタチの生け垣」等のお世話をさせていただきました。本来の仕事は、樹木・樹林を健全な姿に保つことですが、一歩踏み出した

場を模索し、環境教育にたどり着きました。教育に関しては、まったくの素人のため、「環境教育インストラクター」を取得することから始めました。

当初は、樹木医の仕事、治療例等から開始しました。当時は、樹医と混同され、今ほど、樹木医の知名度がなかった中で啓発運動に重点を置きました。平成23年松崎小学校の校長先生から「4年生が、総合の学習



カラタチ再生プロジェクト (松崎小学校)

で学校内の好きな木の名前と特質を調べています。樹木医として児童に話していただけないか」と電話がありました。渡りに船で快諾しました。最初の授業で、樹木が環境にいかに関与しているかを知ってもらい、二回目からは、クラス単位で「この木なんの木、木になる木」を4時間勉強しました。参考書として「葉で見分ける樹木」(林将之著小学館刊)を3〜4人あたりに1冊学校に準備してもらい、広葉樹4種、針葉樹2種の形から入

り、葉の付き方が対生か互生かを実物で解説していきました。教室での基本的説明を済ませ、校庭で、参考書を辞書のように使いつながら樹木の名前が分かるまでお手伝いさせていただきました。感想文には、樹木の名前だけでなく、樹木の大切さもよく分かりましたと書かれていました。

松崎小学校は俳人種田山頭火の母校です。校門西側には「ふるさとの学校のからたちの花」と詠んだ句が碑に刻まれています。カラタチは50年前には、強いトゲで外部からの侵入を拒む防犯生垣でした。ブロック塀の出現で近年は、その姿を消しました。ですから数10メートル

ーに及ぶ松崎小学校の生垣は希少です。近年、この生垣の状況が悪くなってきました。学校からの依頼で樹勢回復にあたりました。毎年、6年生に肥料を入れてもらい、作業を通して、



松崎小学校にて

カラタチが良くなつていく過程を体感してもらっています。今年で治療を始めて4年になります。結果は徐々に現れています。
ESD

（持続発展可能な開発のための教育）

平成24年、兵庫
県西宮市で環境省
主催の「環境教育
等に関する教職員
・環境保全活動を
担う者に向けた研
修」に参加。ここ
で、初めてESD
を知りました。E
SDは、2002
年「ヨハネスブルグサミット」で日本が提案
しました。国連の決議で「持続可能な開発の
ための教育の10年」（2005〜14年）が
満場一致で採択され、推進機関としてUNE
SCOが指名されました。ESDは、環境問
題だけでなく、経済、文化と幅広く横断して
います。地球温暖化、酸性雨、生物多様性の
危機、民族・宗教戦争、貧困と食料問題、世
界経済の破綻等。複雑多岐な問題を身近な所
から、目を向けていきます。従来の知識伝達
型から探求創出表現型に進化させていく手法
がESDの特徴です。基本的に、ESDは、



ESD世界会議パーティー

持続可能な社会づくりの担い手を作る事を目的にしています。

2014年11月に名古屋で閣僚級会議、岡山でグローバルRCE（拠点）会議が開催されました。岡山での国際会議に参加させていただき、同時通訳のイヤホーンに感謝感激。240人の出席者は45カ国からESD研究者、国連大学・ユネスコ関係者、NPO、NGOで構成され、ESD10年の成果とこれからの展開が討議されました。夜のパーティーでは、全員が輪になって踊り、手を取りあつて国際交流を堪能できました。翌日のユネスコ全国大会では、ESD拠点大学の元教授から、
「山口県は松浦晃一郎元ユネスコ事務局長の地元だから、ESDをもっと頑張つてほしい」と激励されました。
「おわりに」
植物は、動けないのではありません。動かないのです。動物は餌を探し、伴侶を求めて移動します。植物は、自分の成長でできる糧を自ら作り出し、風などの自然現象や蜜を代償



グローバルRCE世界会議

に昆虫や鳥から受粉を助けてもらいます。ただし、急激な環境の変化は、植物の進化スピードを超えています。植物が減少すると、依存する生物も絶滅の道を歩むでしょう。
IPCC第五次統合報告書は、今世紀末には、世界の平均気温が4.8度、海面は最大82cm上昇すると予想しています。環境省研究班の報告によると、年間に洪水被害額が2416億〜4809億円増、土砂災害が21億〜31億円増、高潮被害額が2526億〜2592億円。ウンシュウミカンは消滅、ブナ林は9割減。この数値は、人為的結果が原因の多くを占めていると言われています。

「ストックホルム人間環境宣言」（1972年）で、環境教育の目的は、環境保全と環境問題解決の能力を育成し、環境保全を一步ずつ確実に出来る人を育てると明記されています。口に含んだ一滴の水で、山火事を消そうとしたハチドリのように、地球上の生態系の一員として、自分に出来ることとする。環境教育の教えは、この困難な問題解決の糸口となり、絆が生まれます。我々人間は、「愛情」「思いやり」を持って、すべての生物と共生していくことが持続可能につながると思います。

会員だより

節分草自生地保全活動

古市節分草保存会事務局

林 節司

平成21年、岩国市錦町広瀬古市で、節分草が発見されました。節分草は環境省レッドデータブック準絶滅危惧（NT）に指定されている大変貴重な野草です。今までの西限は広島県庄原市（旧総領町）と言われていましたが（公開はしていませんが、三次市にもあるようです）、山口県内ではまだ報告がないということで大変なことになりました。

節分草はキンポウゲ科の可憐な花で、高さ8～15センチ、直径2センチほどの白い花を咲かせます。花卉に見えるのは、ごく片です。関東以西の太平洋側に分布し、石灰岩地を好み、栗や柿などの落葉広葉



樹があり、半日日陰で他の草が嫌がる北向きの寒いところをあえて選んで生き残っています。1月中旬に蕾を持ち上げ、2月の節分の日ごろから咲きはじめて、2月の中～下旬に一斉に満開を迎え、4月中に結実し5月中には枯れてしまいます。「春のはかない命」という意味の典型的なスプリングエフェメラルです。他にカタクリ、一輪草などがあります。当自生地が残ったのは、栗林維持のために毎年草刈をしていたからで、草刈をしなくなると他の草との生存競争に敗れ絶えてしまいます。早速保存会を立ち上げるため会員の募集を行ったところ、地元をはじめ旧岩国市内や周南市などから、節分草を守ろうという強い意志を持った24名の方々が集まり、22年2月に「古市節分草保存会」が結成されました（現在35名）。「まず保存、それから地域振興」をキャッチフレーズに保存活動が始まりました。

絶滅が危惧される希少な花が発見されたものの、公開するか悩んだ末、この可憐で健康な花を皆さんに観てもらおうことになりました。自生地周辺に駐車場がない等の理由で、公共交通機関の第3セクター「錦川清流線」を利用者された方を対象に、公開することになりました。今年の公開日は2月20（金）～22日（日）の3日間です。（完全予約制）

また、21年度の（公財）山口県ひとつくり財団の助成事業を受け、草刈り作業、電気柵の設置、ロープ張り、錦川清流線の古い枕木を利用した木廊の設置、見学コースの設定などを実施し、公開に向けて万全の態勢を整えました。



日本で最も早く咲く自生地ということ、平成23年2月の第一回の公開時には、節分草がない九州、四国地方から多くの人が見学に来られたのをはじめ、遠くは千葉県からも来られました。以降、毎年多くの方が足を運ばれています。また、毎年地元住民をはじめ

小、中学生の皆さんにも節分草にふれる機会を設け、その生態、健全な里山のあり方等について勉強会を開催しています。最近では地域の有力な資源として認識され、地域住民の誇りになっています。

平成23年度には山口県の「やまぐち森林づくり県民事業」の助成を受け、自生地の拡大を図るため周辺の荒れ地を整備し、栗苗の植栽、西日の射すのを妨害していた檜の間伐、枝打ちを行い、自生地の範囲は発見時の5倍（50アール）にまで拡大しました。

このような地道な保全活動を行っている中で、このたび「やまぐちサポーター企業募金事業」（緑化ボランティア団体の支援活動）の助成を受け、草刈機と、強い日差しから節分草の自生地を保護するための落葉広葉樹の栗と柿の苗を購入し、草刈作業の後に植栽しました。

また、財源確保の為、節分草グッズ（レプリカ、一筆箋、ハンカチなど）を作製し、販売しています。

現在、年2〜3回の草刈り作業等の保全活動を実施していますが、今後も自生地拡大と節分草の生態（種子散布の方法、寿命など）が明かされていない部分が多い。）の把握などを通じ、節分草と共存するまちづくりを目指していききたいと思っています。

節分草公開日～完全予約制～

2月20日(金)、21日(土)、22日(日)

■問合先

電話0827(72)2002

錦川鉄道株式会社

〒740-0724 岩国市錦町広瀬 7873-9

■錦川清流線臨時列車の利用者に限定し公開します。

■自生地は錦町駅から徒歩30分。



節分草グッズ



オオサンショウウオの飼育

錦川オオサンショウウオの会

岩国市オオサンショウウオ飼育員

廣兼 健

私が、国の特別天然記念物オオサンショウウオを飼育するようになったのは、日本オオサンショウウオの会全国大会が、平成24年9月末に岩国市錦町で開催されたのがきっかけだ。主な生息地である宇佐川の現地見学に行った。全ての個体がやせ細っており、危機的状況であるという事が明白になった。このまま放置しておく、全滅の可能性が高く、緊急に保護を行いたいが、岩国市としてはどうすれば良いのか分からない。そこで、会の提案により、緊急保護施設を施工、個体17頭を緊急保護したのである。12月より保護施設での飼育や管理を行う人間が必要という事もあり、自ら立候補した。それが飼育の始まりだった。

日本オオサンショウウオの会 桑原一司会長から色々な事を



緊急保護施設

教えて頂いた。餌を与えすぎると突然死する、目の前に手を出すと噛まれる、刺激を与えるると臭いニオイの白い粘液を分泌する、個別飼育しないと喧嘩する等、今考えると当然のように思えるが、それすらも分からないような素人だった。会長が帰り際に「保護個体の半分くらい死ぬよ。死んでも気にしないように」とおっしゃったのが衝撃的だった。

「痩せているために保護している」その名目の緊急保護のため、餌を与え太らせるのが当面の目標となった。しかし前述のとおり餌を与えすぎると突然死する。その境界が、私には見極められず、非常に不安になり、会長に連絡をした。すると「少し少ないくらいが丁度良い」との事。人間も腹八分が良いと言われているが、似たようなものだなと思った。

それ以上に困惑したのが、餌を食べない個体が居た事だ。何度与えても食べない。餌は活ニジマスを与えていたのだが、口にくわえる事すらできない程に弱りきっていた。

どうやって食べさせるか。試行錯誤が始まった。まず、じっくり観察した。餌を切り身にし、与えてみた。しかし食べない。ある時、水槽の壁面に沿って移動している事を発見。移動中に餌を食べられるように水槽内の壁面に近い場所へ置いて一晩様子を見た。翌日、狙いどおりに餌が無くなっていた。それを毎

日1ヶ月間続けた。その結果、その個体はなんとか元気を取り戻した。後日、会長から「死ぬと思っていた。本当に良くやってくれた。」と褒めて頂いた。その後も全個体死なす事なく、飼育中である。現状は上手くいっているが、「いつか必ず問題が発生する」という危機感を常に持つよう心掛けている。

緊急保護時 (H24.11)



放流直前 (H26.7)



26年7月には、元気になった5頭を放流し、テレビや新聞に取り上げて頂いた。また、展示や講演にも取り組み、地域の方々にオオサンショウウオを知って頂く機会を作った。今までは「そこの川に居るだけの平凡な存在」だったが、学び・知り・考える事で、人々の意識が変わり、オオサンショウウオ文化が生まれる、その第一歩のような気がした。今後機会があればこのような取り組みを行いたい。

八代のナベヅル保護活動

NPO法人ナベヅル環境保護協会

理事 末松幹生

八代の空にナベヅルが舞う。山口県周南市八代は、本州でただ一ヶ所のナベヅルの越冬地です。毎年10月下旬、中国やシベリアの繁殖地から、はるばる渡ってきます。ナベヅルは、田んぼに羽を休め、八代の人々とともに冬を越します。3月、春の訪れを待つツルは、故郷の繁殖地へ帰っていきます。四方を山に囲まれた八代盆地の夜明けは遅く、あぜ道が朝もやに透けて見えるころ、ナベヅルは山のねぐらを飛び立って、盆地中央にある餌場の田んぼに舞い降ります。朝の寒さに「クルー、クルー」とナベヅルの声がこだまして、ツルと人々の一日が始まります。餌場に降りたナベヅルは家族ごとに縄張りを持ち、一日中、ここで過ごします。餌を食べ、歩き、舞い、休み、ときには争い、様々な表情を見せてくれます。

翼を広げると百八十センチもある大きなナベヅルは、上空を飛ぶ姿は優雅ですが、飛び立ちと着地には長い滑走路と器用な技術、大きな力を必要とします。ナベヅルは、遠い昔から八代の風景、人々の生活の一部でした。



ナベヅルのねぐらの整備作業

太陽が山の端に沈むと、ツルは山間の田んぼにあるねぐらへ帰っていきます。誘い合い、群れとなり、一列にならんで飛んでいきます。ツルのねぐらは、山奥の田んぼです。稲の収穫が終わった、人の来ない、静かで安全なねぐらで群れを作って休むのです。

ねぐらと餌場の整備は重要な保護活動の一つです。繁った草を刈り払い、田んぼを耕します。あぜを塗り水を張ります。ナベヅルは水辺の鳥なのでこうしないと寝ないのです。見晴らしをよくするため、飛び立ちと着地のため、まわりの木の枝を刈り払います。

こうして安全なツルのねぐらが出来上がります。ツルのための秋の年中行事です。

人々に愛されているナベヅルですが、環境の変化から現在では越冬数が激減し危機的な状況になってしまいました。今年も越冬数は6羽と淋しい限りです。一九九五年、八代のツルを愛する会は、全国のツル研究者を招いて「ナベヅルサミット」を開催しました。会議で60年代から八代のツルを観察してきた西田智さん（日本野鳥の会北九州支部）は、これまでの飛来データをコンピューター処理して作成した八代のナベヅルの「絶滅曲線」を発表しました。そして「八代のナベヅルは2〜6年以内に絶滅しても不思議はない」と警告しました。

その後、八代のナベヅルを守るため八代の人々、国、県、市も様々の対策を講じてきました。しかし、ナベヅルの減少はくい止められていません。八代にナベヅルがやってこなくなる日、本州からナベヅルの越冬地がなくなる時は、いよいよ現実味を帯びてきました。私たちはツルとともに暮らし受け継いできたツル保護の伝統を、なんとしても守りたいと考えています。八代のツルが危ない！皆さんの理解と協力と参加をお願いします。

里山再生活動20年間の歩みの中で

ヒュッテ 桂谷ランブの宿

マネージャー 畑山静枝

今から20年前の平成7年7月、東京で出版印刷会社経営、子育てをしながら、全国ふろさとエッセイ誌（ふるさと紀行）を発行されていた佐伯清美さん（現ランブの宿代表・管理人）と、佐伯さんの母校（卒業第一期生）山口県鴻城高等学校理事長の小田穰亮さんと、この私の3人で、小郡上郷桂谷の集落奥の里地に初めて足を踏み入れたのが、里山再生活動を始めるきっかけでした。

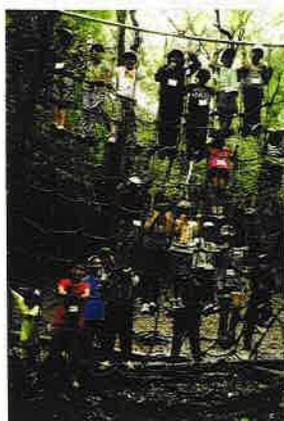
佐伯さんは、全国の里山の荒廃を目の当たりにして、これは何とかしないといけない、という思いを強くしていたところへ、荒れた桂谷の山林、里地にご縁が出来たのでした。佐伯さん66歳の時、桂谷での（ふるさとへの恩返し）の一步が始まったのです。ふるさと紀行の全国の愛読者への呼びかけや、小田さん、地元の地権者の方々のご協力、ご理解の元、まず、杉の木の間伐から始まり、それをもとに、ログハウスを手作りしました。その間、いろいろな苦しいことがいっぱいありましたが、4年半かけてログハウス・第1棟目は完成しました。とにかく、全国各地からボ

ランテアを動員して、無我夢中で再生活動に励んだのです。

その頃より、県民活動、市民活動のいろいろなお役目を引き受けて、（おひろめ大使）として山口県のPRに協力したり、子育て支援にも力を注ぎました。

やまぐち自然共生ネットワークにも加入し、リレーミーティングでは、周防大島、平生町の極楽寺、萩市の笠山ウオーキングなどの集いに参加し、同じ自然を愛する活動団体とも交流が活発化し、楽しい思い出がいっぱい出来ました。

佐伯代表は、県の、環境パートナーとして子どもたちに自然環境教育をしています。昨年は、子育て団体や防長青年館の主催で、禅



自然体験をする子どもたち



第6回リレーミーティング
周防大島での地引き綱

定寺山の登山を実施しました。今年も、ボランテア仲間と登山道の修復、橋の架け替え作業をしますが、県当局のご指導、ご理解、ご支援も仰ぎたいとの思いでいっぱいです。

こうした、里山周辺の整備、復活、活用活動は、私たちの第一目的には変わりはありませんが、元来、里山は、人にも動物にもやさしい、奥山と人里との、重要な接点、緩衝地帯であったはずで、人だけが一番として奢るのではなく、全ての生きものが共存して暮らしていける、そんな里山作りを目指したいと思っています。目下、3年越しで取り組んでいます第10棟目の里山多目的ふれあいスペース・えほんとおもちゃ（どんぐりの家）建設にも、全力投球しています。完成の暁には、子育て支援はもとより、被災した東北・福島の子どもと親の保養支援、高齢者の健康生きがい支援と夢は膨らむばかりです。物が豊かすぎると弊害が叫ばれる時代において、特に次代を担う青少年、子どもたちには、好奇心、冒険心を育ませて、未来を生き抜く力をつけてくれる自然体験こそが大切と言えるでしょう。

私たちも、老いてはいられなくなりました。自然の恵みに感謝して、思い切り体を動かして、少しでも世のため、いえ、自分自身のために、さあ、今日もがんばるとしましょうか。

次世代にバトンを繋ぐ

山口県シエアリングネイチャー協会

福田和子

『ネイチャーゲーム』との出会い

「昔はよく野山で遊んだものだ・・・。」
今、自然体験活動や、自然保護活動などに関わる多くの大人は、この言葉を口にするでしょう。かくいう私もその一人で、保育園、小学校時代にはよく家の周りや近所の山で遊んでいました。服が汚れようが、怪我をしようが、親は叱りませんでしたし、近所のおじさんやおばさんたちも温かく見守ってくれていました。

そんな私ですから、約20年前に初めてネイチャーゲームを体験したときの感想は、“なぜわざわざ（イベントとして）野外遊びをするのだろうか？”でした。

でも考えてみたのです。確かに小学生までは外で遊び、自然とふれあう機会も多かったですが、大人になってから自然を見ているか、感じているかと聞かれれば、「いいえ」と答えるでしょう。そして家の周りを見渡しても、かつて遊んだ山は荒れ、川も遊べる状態ではありません。たとえイベント型であったとしても、自然とふれあえる『場』をつくるという

ことは、今の時代にとって大切なことではないかと思うようになりました。そして私は、気軽に遊びながら子どもも大人も一緒に自然とふれあえるネイチャーゲームの活動を始めました。

『自然体験と子どもたちの成長』

活動を続ける中で、子どもたちの成長を目



にする機会が多々あります。虫が苦手な子どもがだんだんと虫に触れるようになり、地面の上に直に座れなかった子が、服が汚れるのも気にせず

遊べるようになったり、虫や鳥などの生きものに詳しくなったり私たちに教えてくれたり。また、おとなしかった子が友達をつくって元気に走り回ったり、高学年になるにつれて下の学年の子の面倒をみたりと、回を重ねるごとに変化が見られ微笑ましく思います。

文部科学省の報告の中にも『「自然体験」が

豊富な子どももほど、「道徳観・正義感」が身につけている傾向が見受けられました」とありますが、本当にそう思います。子どもたちは、見過ごしてしまいそうな小さなものや不思議なものなど見つけてきたり、それらを表現する言葉がとても素敵だったりして、時にはびっくりすることがあります。さまざまな自然体験の中で豊かな情緒が生まれ、感性が磨かれていくのだと思います。

『未来へ向けて』

自然体験をした子どもたちが将来大人になった時、どんな社会をつくってくれるのでしょうか。

次の世代へうまくバトンを繋ぐことができよう、活動に参加してくれる多くの子どもたちの心に自然に対する愛情と敬意の種を一生懸命蒔き、いつか必ずその種から芽が出て花が咲くことを願って、これからも地道に活動を継続することが大切と思っています。



リレーミーティング in 錦川流域

平成26年10月18日(土)から19日(日)の二日間にわたり岩国市錦町で、第11回リレーミーティングが開催されました。

県内各地からの参加者は18名。道の駅ピュアラインにしきで開会式を行った後、各自マイカーで「オオサンショウウオ緊急保護施設」へ。岩国市の御協力のもと、飼育員の方から、国の特別天然記念物オオサンショウウオについての説明を伺いました。ほとんどの方がオオサンショウウオを見るのは初めてであり、厳しい自然環境の変化による絶滅への危惧に対する緊急保護の必要性を強く感じました。また、特別に貴重なエサヤリ(コアジ)体験をさせていただくことができました。



緊急保護施設でエサヤリ体験

続いて、パワースポット、須川のナイアガラ(滝?)、俊道様への参拝、オオサンショウウオ生息地の宇佐川上流見学に向かいました。



須川の滝へ

予定どおり16時に「らんかん高原交流センター」へ到着。白井会長の講演(「オオサンショウウオの保護活動」)の後、地元の錦川流域ネットの皆さんのお世話による交流会がありました。

翌日は、高原植物等の解説を伺いながら羅漢山登山へ。山頂には、以前やまぐち自然共生ネットワークが建てた「羅漢山の磁石岩」の解説板がありました。

心配していた冷え込みもなく、両日とも素晴らしい晴天に恵まれました。錦川流域の豊かな自然を体感するとともに、会員同士の情報交換や交流が図られた有意義な二日間でした。

羅漢山山頂にて



やまぐち自然共生ネットワークの磁石岩解説板(羅漢山山頂)



今回の開催にご尽力いただきました関係の皆様には厚くお礼申しあげます。次回の開催地はまだ決まっておりますので、御協力いただける団体がいらっしゃいましたら、ぜひ、事務局まで御連絡をお願いします。多くの会員の皆様のご参加をお待ちしています。

祝 会長表彰

平成26年度の総会(5月25日(日)周南市大田原自然の家)において、高辻一男さんのやまぐち自然共生ネットワーク会長表彰をしたところですが、12月10日に副賞の記念樹「モミジ」の苗とプレートを贈呈しました。

「高辻一男さんの功績」
長年にわたり、錦川清掃活動をはじめ、羅漢山湿性植物や寂地山のカタクリの保護等の自然環境保全実践活動に努められた功績が顕著である



総会での会長表彰
(H26. 5. 25 周南市大田原自然の家)

贈 記念樹(モミジ)

高辻 一男 様

あなたは、長年にわたる努力と情熱で、錦川の清掃活動、羅漢山産地生植物保護活動をはじめ、カタクリの保護のため寂地山山頂付近の保護柵の設置に取り組まれる等、自然環境保全活動に精励されました。
よって、ここに記念樹を贈り感謝の意を表すとともにその功績を讃えます。

平成26年12月吉日
やまぐち自然共生ネットワーク会長 白井 啓二



高辻一男さん(左)と白井啓二会長
(H26. 12. 10 岩国市錦町広瀬)

表彰プレート

「編集後記」

昼休みに、体力づくりとリフレッシュを兼ね、職場近くをウォーキングしています。四季折々の風景を楽しんでいただけでなく、道ばたの草木の名前や、さえずる鳥が以前より気になリだしたような気がすると同時に、「自然」についての勉強不足を痛感しています。

やまぐち自然共生ネットワークは、自然に関わるいろいろな分野の団体と個人の皆さまの全体的なネットワークにより形成されています。このネットワークの情報交換、情報発信の場をもっと提供できたらと思います。

このたび執筆いただきました皆さまには心よりお礼を申し上げます。

皆さまのご意見・ご投稿をお待ちしています。



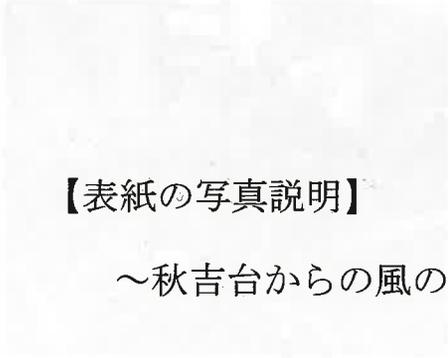
五十鈴川ダム湖(山口市)



編集担当 田中



Faint text caption below the upper right image.



【表紙の写真説明】

～秋吉台からの風のたより～

Faint text caption below the lower left image.

Faint text caption below the lower right image.